

ひとときたどって

みそ汁 ヘルパーさんの元気の源

介護事業所 日々の働き支える手作りの一杯

お昼のぬくもり
2021年2月4日掲載 橋本さんの投稿
(東京・大阪・名古屋本社版)

勤務する職場の朝は早く、7時過ぎにはほぼ役員が出勤してきます。事務所のドアを叩くと、隣接したキッチンからおいしそうな香りが漂います。料理手は笑顔で「おはようございます。みそ汁の匂い、いいですね。」

「これはヘルパー、ケアマネジャーを含む介護事業所、利用者さんを抱え、コロナ感染の高リスクに日々さらされながらの仕事です。感染予防の免疫力アップを続けるはあたりなく、昨年3月(

(裏目)



事務所で、梅田達也さん(右)がつくったおみそ汁を食べる菅原有梨沙さん。「おいしかったとか、この具はいいちだったとか、おみそ汁が会話のもとになっています」＝横浜市のNPO法人「ことぶき介護」

横浜市のある介護事業所に、在宅介護の最前線で働くヘルパーたちが毎日心待ちにしている「おみそ汁」があります。具だくさんの温かい一杯は、コロナ禍で2年にわたり緊張が続くヘルパーたちの、心と体を満たしています。

同法人は横浜市寿地区で訪問介護やケアマネジメント(居宅介護支援)などを行っている。ヘルパーたちは朝から利用者の自宅を回り、昼時に事務所に集まっていく。昆布が利いただしに、具だくさんの温かいみそ汁を前に、ヘルパーの菅原有梨沙さん(30)の顔がほころんだ。「あったかいものを

梅田さんはほぼ毎日、お昼にみそ汁とぬか漬けをふるまっています。朝も時過ぎに出動して、小さなキッチンでだしをとり、野菜を切り、みそ汁を作ってから仕事を始める。ケアマネジャーの橋本由紀子さん(69)は「朝からおみそ汁の香りがすると、仕事の前からお昼が楽しみになります」と笑顔になった。



ひとときに投稿してくれたケアマネジャーの橋本由紀子さん＝横浜市

日雇い労働者の町として知られていた同地区は、年々高齢化が進み、市による簡易宿泊所に住む人の65歳以上の割合は54.2%(20年度)。元労働者だけでなく、保証人や敷金・礼金が不要で、単身でも入居しやすいことから、一人暮らしの高齢者も流入し、次第に介護が必要になる人も増えていくという。同法人もヘルパーとケアマネ約40人が200人以上の利用者を支える。

梅田さんと橋本さんは元々、介護事業を行う市の外郭団体の関係だったが、より地域の実情に合わせたサービスをしたと、梅田さんが03年に独立した。梅田さんが不自由で自立が難しい、身寄りがない、経済的に厳しい...利用者には様々な困難を抱える人も多いが、事業所では「どんな事情の人が来ても断らな」「ことを大事にし、介護を提供し続けること」に使命感を持っている。その理念を支えるヘルパーたちは1人につき1日、7、8軒の利

梅田さんと橋本さんは1年前、「ひととき」に投稿。「緊張が続いている中でも、ほっとする時間があること」が、梅田さんへの感謝を伝えたかったという。梅田さんは「天したくどではないけれど、お昼が一息つく時間になっていたらうれし」と照れ

(細田孝一)